

Title	<新刊紹介>山口堯二著「日本語疑問表現通史」
Author(s)	高山, 善行
Citation	語文. 1991, 56, p. 47-48
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68830">https://hdl.handle.net/11094/68830</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

山口堯二著『日本語疑問表現通史』

高山善行

本書は日本語の疑問表現に関して精力的な研究を積み重ねてこられた著書が論考をまとめられたものである。最近、疑問表現の研究が盛んになりつつあるが、はやくからこの分野に着目して堅実な成果をあげてこられた著書の一連の論考は、まさに時代を先取りしたものであり、それらに加筆修正を加えて成った本書によって、われわれは文法研究の最先端を確実に知ることができるのである。本書の構成は以下に示すとおりである。

第一編 疑問表現とその周辺

- 第一章 疑問表現の原理
- 第二章 疑問表現の方式と形態
- 第三章 疑問表現の情意
- 第四章 疑問表現の否定
- 第五章 疑問表現の推量語
- 第六章 疑問表現の推移
- 第七章 疑問表現と感動語・呼掛語・応答語
- 第八章 喚体性の文における疑念の含意―「しづ心なく花のちるら

ん」の基底―

第二編 不確定成分とその周辺

- 第九章 不定方式の不確定成分―疑問詞の不確定用法―
- 第十章 特定方式の不確定成分―疑問助詞の不確定用法その他―
- 第十一章 不確定成分の構成とその推移
- 第十二章 副助詞「など」とその周辺

第一編では広義の疑問表現を中心に論が展開されている。

第一章……疑問表現の分析においては従来「問い」に重点がおかれてきたが、著者は視点を「疑い」に置くことよって疑問表現の原理を考察しようとする。

第二章……疑問表現の方式を二種三類に分ち、典型的な疑問表現を中心にその主要な形態を押さえる。

第三章……広義の疑問表現に担われやすい情意の質とその位置づけがなされている。

第四章……疑問表現における否定の機能について論が展開され、とらえにくかった様々な現象の分析が明快になされている。

第五章……疑問表現の述語文節における推量語の機能について詳しく分析される。

第六章……「構文の論理化」と「情意的なものの減少」という観点から、上代から現代に至る疑問表現の推移が見通されている。

第七章……疑問詞や疑問詞を核とする成分の一語文的表現への転化について考察がなされる。たとえば、疑問詞「なに」が「なんと（なに＋と）！」のように感動詞に転化したり、「なによ」「なんです。」のように応答語に転化したりする。このような転化が疑問詞そのものに内在する性質をもとに分析されている。

第八章……古来より議論の絶えない「しづ心なく花のちるらん」歌の解釈をめぐって考察がなされている。喚体性の文に含意される疑念の存在を指摘し、難問の解決に向けての見通しを与える。

第二編は不確定成分に関する論が展開される。（疑問詞、疑問詞が平叙文において、不確定的な意味性を担う成分の標識として用いられる時、これらを著者は不確定成分と呼んでいる）

第九章……疑問詞を核とする不確定成分について、その意味の表示性が疑点表示、不定表示、代理表示、網羅表示、強述表示の五つに分類、整理されている。

第十章……疑問助詞の不確定用法について、並列方式と単独方式に分けて意味の表示性が分類、整理される。

第十一章……不確定成分の構成の時代による推移について、「成分構成が挿入句という形式にどれだけ依存するか」「句の語料的資材化と疑問助詞の形態」「係り結びの崩壊に伴う疑問助詞の副助詞化」という視点から検討がなされる。

第十二章……不確定成分「なに」を出自とする副助詞「など」を

取り上げ、その用法が分析されている。疑問表現研究の応用範囲の広さを示していると言えよう。

以上の内容から見えてとれるように、本書は単なる論文集ではなく、一貫した研究書をなすものである。論はひとつひとつの段階を押さえつつ確実に進んでいく。その堅実な方法は前著「古代接続法の研究」と同様であって、説得性の高い説明を支えているように思われる。また、従来、疑問表現の歴史的研究は外形面の変遷に偏りがちであったけれども、本書はまず各時代に共通する意味的構造を押さえるところから出発している。これが正当なありかたである。狭く「××時代語研究」のように限定せず、「通史」として展開される論の視野の広さに、多くの読者は迫力を感じることだろう。

原理的考察を基盤に展開される論は、しかし、抽象論に傾きすぎることはない。挙げられた豊富な実例、それらに対する緻密な検討からわかるように、現象に対する目配りの広さ、解釈の深さと調和する。その方法によって、はじめて日本語の疑問表現の全体像がくつきりと描き出された。見通しのよさを従来のそれと比較して言えば、地上写真と航空写真ほどの差が認められるであろう。

意味という抽象物を基盤にして整然と配列された現象は、木々が森をなすようにひとつの組織だった世界を形成する。本書はそうした世界の創造こそが文法研究の最大の魅力であることを教えてくれる。専門の研究者にとって必読の書であることは言うまでもないが、入門期にあたる学生諸氏においても、本書によってできるだけはやく著者の世界に出会うことを願ってやまない。

（平成二年一月三十日、明治書院刊、定価五八〇〇円）

—— 本学助手 ——